

政治宣伝に利用されるドイツのクリスマス —1870年から1930年代はじめまで—

桑原 ヒサ子

はじめに

ナチス・ドイツ時代に最も読まれていた女性雑誌『ナチ女性展望』（1932年7月第1号—1944/45年号）は、官製雑誌として時代が要請する理想的女性像を伝える一方、主婦向け商業雑誌と同様、料理やファッション、連載小説や広告などの実用記事や娯楽要素を満載して読者の要望に応えた。そのなかでも、毎年アドヴェント（待降節）が始まる時期から2号から3号にわたるクリスマス特集号は目を引く。

掲載されるクリスマス記事は、大きく二分することができる。一つは、今日にも通じる家族的なクリスマスの祝い方の紹介である。クリスマスツリーをはじめとする飾り付けや、クリスマスプレゼントの手作りの方法、クリスマスのレシピ、それに何といても子どもたちの教育に及ぼす家庭内のクリスマスの意義についてである。他方は、クリスマスにかかわるゲルマン的慣習へのイデオロギー的回帰、冬期救援事業のような社会的組織的クリスマス活動による民族共同体の強化、そして戦争遂行の精神的支えとして利用されるクリスマスまで、家庭外の、社会的政治的に利用されるクリスマスの姿である。

たしかに国民社会主義の局面では、文化政治的アジテーションとしてのクリスマスの役割が明瞭に見て取れるが、クリスマスのもつ内面と外面、すなわち家族的な祝祭の形と、社会・政治的フィールドにおけるクリスマスの道具化との相互作用は、19世紀後半に貴族や富裕市民層の間でクリスマスが祝われるようになって以降、赤い糸のように20世紀におけるクリスマスの歴史を貫いている。

したがって、ナチ時代のクリスマスについて分析する前に、本稿では、ナチスの政権掌握までのクリスマスの社会的・政治的意味を概観する。まず社会的経済的發展と不可分であった19世紀に興隆する富裕市民階級に定着するクリスマスの意味を振り返り、次に独仏戦争と第一次世界大戦における愛国主義と戦意高揚の目的でどのようにクリスマスが利用され、戦争によりクリスマスの祝祭が国民一般に広がっていったのかを確認し、第三に、第一次世界大戦後の社会的混乱と困窮を浮き彫りにする手段として使われるクリスマスに触れ、最後に主要政党である国民社会主義ドイツ労働者党（以下、ナチ党）、ドイツ社会民主党、ドイツ共産党が政党活動をする上でクリスマスにどのような意味づけを行い、しかしプロパガンダを展開する上でどのような現実的制約を受けていたのかについてまとめていく。

1. 19世紀の市民階級の家庭の祝祭としてのクリスマス

クリスマスを中心にするアドヴェント、聖ニコラウスの祝日、シュトレンやクリスマス・クッキー、飾り付けられたクリスマスツリー、降誕の厩、クリスマス料理、クリスマスの歌と贈り物。今日ドイツのどの家庭でも祝われる祝祭の形が整うのは、ようやく19世紀末から20世紀初頭のことである。

クリスマスの象徴として最も重要なのはクリスマスツリーだが、その起源は、キリスト教以前の異教時代に古代ローマ人やケルト人、ゲルマン人が冬至に魔除けとして常緑樹を家に飾った習慣にある。それが、現在のようにモミの木に飾り付けをしたクリスマスツリーを室内に飾るようになったのは、15～16世紀のアルザス地方に始まると言われている。¹⁾1820～30年頃にはドイツ語圏の王侯貴族を中心にクリスマスツリーを飾る習慣が定着する。²⁾(図1)それを富裕な市民階級が倣うようになった。(図2)



図1
ウィーン王宮のクリスマス (1886年頃)
(画：W. ガウゼ 1854-1916)



図2
富裕な市民階級のクリスマス
(1883年)

19世紀に興隆する市民階級とクリスマスの祝祭の発展の関係について、ドーリス・フォイツィクは興味深い指摘をしている。³⁾すなわち、調和的に演出された家族の祝祭は、市民階級の厳しい行動規範によって抑圧しようとした家族内の摩擦や葛藤だけでなく、外界から家族に対して影響をおよぼす社会的不正義、経済的危機、戦争による家族の存在の脅威などの問題を遮蔽する機能をもった。こうした「ブルジョアのクリスマス」は、第一次世界大戦後の経済的困窮期には、労働者階級によって社会的経済格差を攻撃する道具となっていく。

一方、子ども時代に「調和的に演出された家族の祝祭」を体験した中産階級の大人にとって、クリスマスは「幸せな子どもの世界」として深く記憶に刻まれ、憧れの家族行事として次の世代へ引き継がれていった。のちに『ナチ女性展望』が読者層である中産階級の女性たちに、窮乏期や戦時下であっても、子どもたちのために幸せなクリスマスの演出の重要性を説き、具体的なアイデアを掲載する記事には、19世紀以来の市民階級の家族で祝うクリスマス観が背景にあることは明らかである。

こうして、19世紀後半には市民階級が家族内の祝祭に大きな意味を持たせたことから、クリスマスは、教会の祝祭から徐々に分離していった。そして、家庭内でクリスマスを祝う習慣がさらに一般に広がるには、戦争が大きな役割を果たした。

2. 戦争とクリスマス

19世紀にナポレオンが台頭し、ドイツとフランスの間で戦争が始まると、古来、生命力や希望の象徴とされてきたモミの木は、プロテスタントとカトリックの違いを超えてドイツ人全体のシンボルになった。⁴⁾しかし、戦争遂行のために心理的操作としてクリスマスが初めて利用されたのは、ドイツ統一のためにナショナリズムの形成を目論んだ独逸戦争の時だった。



図3
軍艦内に飾られたクリスマスツリー
(画：F. リントナー 1847-1906)

(1) 独仏戦争 (1870年7月19日—1871年5月10日)

すでに貴族の将校たちの間で欠かせない年中行事として定着していたクリスマスは、兵舎や野戦病院など戦争のさまざまな場所で祝われた。(図3) その目的は、戦争の現実から兵士たちの気分を紛らわすためだった。

銃後の戦時報道にも明らかな傾向があった。すなわち、「地には平和」というキリスト教のメッセージには、平和を手に入れるために戦争に駆り立てるスローガンが透けて見えた。そして、家庭雑誌に掲載されたクリスマスを祝う兵士たちの絵は、戦争の日常の無害化・美化を追求し、読者に戦場の正常さを信じ込ませようと腐心した。図4では、兵士たちが将校の部屋の暖かい暖炉のそばに立つ輝くクリスマスツリーの飾り付けをしている。満足げに瞑想する顔がある。サーベルと軍服以外、戦争を想わせるものは何一つ見ることはできない。



図4
1870年パリ郊外。
クリスマスツリーに集う兵士たち

図5に描かれている1870年の国王本営の一場面は、クリスマスの儀式と英雄崇拜という戦時宣伝の目的が融合している。光り輝く巨大なクリスマスツリーがいくつも設えられた場で、プロイセン国王ヴィルヘルム一世が、オルデンブルク大公ニコラウス・フリードリヒ・ペーターに占領した地域の名前が書かれた球形のチョコレートをプレゼントしている、と注釈が加えられている。⁵⁾

戦時の宣伝者たちは、塹壕のなかのクリスマスツリーに戦争完遂の心理的道具を発見したのである。クリスマスツリーは、家族への思い、平和や快適さへの憧れ、さらにドイツ民族の優越性、そしてドイツ性の勝利と、戦争後の「幸せな世界」という輝かしいユートピアを代弁した。

勝利の戦争から故郷に帰還した兵士たちは、貴族や富裕な市民のクリスマスの祝い方をドイツ人の手本としてドイツ帝国に広めていった。

(2) 第一次世界大戦 (1914年7月28日—1918年11月11日)

第一次世界大戦においても、クリスマスにかかわる戦時プロパガンダは、センチメンタルな戦争の無害化と宗教的に婉曲に表現された偏狭な愛国主義の混合だった。

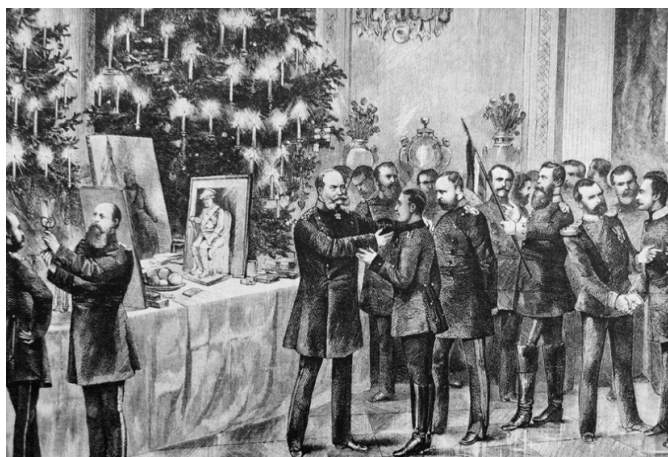


図5
ヴェルサイユの国王本堂での
クリスマスの祝祭（1870年）

帝国内における教会は、プロパガンダにおいて重要な役割を引き受けていた。皇帝と戦争は神のご加護を受けていると明言し、戦争推進派として皇帝を支援する説教を行い、開戦を「新しいドイツのクリスマス」と称え、幼児キリストは「戦士の子」に置き換えられた。⁶⁾ 国家の連帯、国民の大多数の戦争への熱狂が、戦争プロパガンダとキリスト教のクリスマスの平和のメッセージとの間の矛盾を隠蔽した。

この戦争でも、兵舎、塹壕内、野戦病院などでクリスマスツリーが立てられ、戦友が見張りに立っている間、家族からのクリスマス小包を開き、特別配給を受け、プレゼントをもらうクリスマスの祝祭が開催された。「きよしこの夜」は軍隊の歌謡集に収録され、戦争はこのクリスマスの歌の普及にも貢献した。そして、クリスマスツリーは、「ドイツのクリスマス」という国家的シンボルとなっていくた。

1914年の戦場のクリスマスの模様を伝える兵士の手紙を見てみよう。

僕たちはちょうど24日の夜10時に交替しました。イギリス兵もクリスマスの歌を、例えば見事な四部合唱曲を歌っていました。我が軍の方でも美しい古い歌が聞こえました。時々射撃の音がまざるだけです。塹壕のなかの歩哨の位置を樅の枝と故郷から来た金箔で飾りました。地下の小屋も。それから10時に他の中隊が来、我々は舎営まで1時間半の行軍をしました。久しぶりでこの上なく美しく晴れた夜でした。クリスマスにはお誂えむきの静けさ、かぐわしい清らかさでした。凍りついて、ぬかるみも泥もお終いになりました。僕はしきりに家のことを考え、家ではクリスマスツリーをこしらえないというのを残念に思いました。(…)

みんなが集まったところで、名前が呼び上げられ、それから小包が頭ごしに渡されるのは、美しい情景でした。みんなはクリスマスの子どものように、牝牛小屋のまぐさ

桶のそばでロウソクの火をたよりに小包の前に跪いて包みを開きました。(…) 晩はほんとうのクリスマスのお祝いでした。2本の大きな樹が大きな机の上で燃えていました。ほしいものは何でもあり余るほどありました。羊毛の品々、煙草、ライン地方のクリスマス菓子、チョコレート、ソーセージ — その他さまざまな慰問品。ドイツは我々のためになんとという好意を尽くしてくれたことでしょう。それから連隊長と、師団付き牧師が来ました。聖なるクリスマスの物語が朗読され、なつかしい古い歌が歌われました。⁷⁾

この手紙を書いたマールブルク大学哲学科の学生カール・アルダクは、この手紙の3週間後にフランス北部のプロメル近郊で25歳の若さで戦死したから、クリスマスにツリーを飾る習慣を故郷に伝えることはできなかった。前線兵士のためにクリスマス小包を作り発送する仕事は、銃後の女性団体によって結成された「全国女性奉仕団」の重要な活動の一つだったが、この手紙にあるように、開戦後初めてのクリスマスだったこともあり、プレゼントの内容はかなり豊かだった。クリスマスプレゼントを受け取れない兵士がいないように組織的配慮が行われ、前線と故国の感情的一体化の強化が図られた。

ライプチヒ大学法科の学生だったマルティン・ミュラーは、やはり1914年のフランス北部タユールで、戦場でのクリスマスに本格的なガチョウの焼肉とパン、コーヒーを楽しんだと報告している。夕方からクリスマスの礼拝に出て、僧院地下室で行われる中隊のクリスマス祭に参加する予定だったが、「非常集合」がかかる。背囊には必要品のほか、慰問品のソーセージ、レープクーヘン、アーモンド入りの菓子や煙草を詰め込んでいる。そのほかの持っていけないものは別の袋に入れて残したが、その中には小さなクリスマスツリーも含まれていた。移動の汽車のなかで、兵士たちはクリスマスの歌を次から次へと歌ったという。極寒の行軍後、疲労困憊して目的地に着くと、「きよしこの夜」の歌が流れてきた。その場所へ行くと、火が燃えている屋内で、イエナ大学の工兵が皇帝を賛美する演説を行い、力強い万歳三唱が起こった。その工兵は来訪者にテーブルの上に立つ針金や小さい鈴、金銀の糸で装飾されロウソクを灯したクリスマスツリーを自慢げに披露した。ミュラーは、それを感動的で忘れられない光景として手紙に記録している。⁸⁾ 戦時のドイツのクリスマスツリーが、若い兵士たちにドイツ皇帝へのゆるぎない忠誠心と愛国心、熱狂的戦争賛美と戦友同士の堅い絆の象徴となっていたことが読み取れる。

たしかにクリスマスツリーは、ドイツ兵にとって特別な意味をもっていたが、アルダクの手紙にあるように、敵兵にとってもクリスマスは重要な祝祭だった。クリスマスの雰囲気、軍の戦闘モラルにネガティブな影響を及ぼしうる例として、フランドル地方の前線で開戦1年目のクリスマスに、敵と味方の間に例を見ない「クリスマス休戦」と呼ばれ

る親睦の場面が出現している。⁹⁾

敵味方ともに戦闘準備は整っていたが、ドイツの塹壕からクリスマスの歌が響いてくると緊張がゆるみ、イギリス兵とフランス兵が唱和した。ある前線ではドイツの連隊の楽隊が、ドイツとイギリスの国歌を演奏し、その後イングランド民謡の「ホーム、スイート、ホーム」まで演奏したという。全前線で次第に武器の音はやみ、兵士たちは塹壕から出てきて、お互いにクリスマスの挨拶を交わした。次第に無人地帯にまで進む者も出て、敵の塹壕に入って祝うものがあった。戦場では活気のある物々交換が行われた。両者とも沢山のクリスマス小包を受け取っていたからだった。

「クリスマス休戦」が発生した背景¹⁰⁾には、戦争が予想したよりも長期化したため、戦死者の回収や埋葬、塹壕の修復を行うために、相互に短期間の停戦が暗黙のうちに生まれていたこと、また、戦争の長期化は備蓄物資の枯渇を招いたため、両軍とも春まで本格的な軍事作戦を停止すると決めていたことがあった。しかし、「クリスマス休戦」は公式な停戦ではなかったため、ドイツの新聞に「クリスマス休戦」についての記事が掲載されると、二三日後に軍事当局は、メディアに対してその出来事についてのいかなる言及も禁止し、一方で、そのようなことが再度発生すれば、重大な結果になると軍を脅した。数千人の兵士が加わったと報告されているが、それほどの大人数ではなかったものの、似たような親睦はその後もあったらしい。宗教的ユートピア的「クリスマス休戦」は、そもそも軍事行動とは相いれなかった。西部戦線の戦争の激化に伴って、クリスマスの親睦も終わった。

戦場でのクリスマスに関して特にセンセーショナルな出来事は、クリスマスの祝祭に皇帝が参加したことだった。クリスマスツリーの下に立つ皇帝は、さまざまな戦争年代記に欠かせないモチーフだった。『ハンブルク戦記 1914年』から、900名の兵士が参加した祝祭の形態を詳しく知ることができる。広々としたホールには、モミの緑の枝といくつものクリスマスツリーが飾られた。部屋の正面には祭壇と大きなキリスト生誕の厩がセットされていた。強調されているのは、将校も兵士もみな同じプレゼントを受けたことである。すなわちレープクーヘン、リンゴ、ナッツ、皇帝の写真、兵士にはそのほか葉タバコと紙巻きタバコがあった。「闘い」と「勝利」といった言葉が続く皇帝のスピーチは、「戦友たちよ」という呼びかけで始まった。スピーチの演出が目指したのは、すべての社会的対立を止揚し団結させる要素としての闘いと勝利を強調し、クリスマスを通して戦争遂行を厳粛なものにすることだった。¹¹⁾

銃後の家庭雑誌等におけるクリスマス表象は、40年以上の歳月が流れていたにもかかわらず、1870年と変わらなかった。兵士たちはギターと歌の本を手にクリスマスツリーのそばに座り、戦友が外で見張りをしている間、地下壕でクリスマス郵便を読み、あるいは、砲撃で破壊された村で両手を組み合わせて祈っていたり、吹奏楽団のクリスマスの音

楽に耳を傾けていた。それは、美的戦争であり、ロマンチックな雰囲気が漂う冬のクリスマスであり、破壊すら絵のような美しさに見える。兵士は清潔で破けていない軍服を着用し、彼らの顔にはクリスマスの平穏が表れている。怪我を負っている場合は、せいぜい腕を吊る包帯をしている程度だった。¹²⁾ こうして、戦場は安全で安心であること、戦争の美的側面を読者に積極的に伝えようとした。

歴史上初めての総力戦となった第一次世界大戦では、銃後の女性たちも思想信条を超えて団結し、国家の戦争遂行を支えた。あらゆる女性団体を結集して成立した「全国女性奉仕団」は、食料配給や工場経済において女性が自主的に戦時動員できるよう調整する組織だったが、アルダクの手紙にあったように、前線のための小さなクリスマスツリーを入れた小包を準備し、傷病兵を慰めるためにクリスマスのお芝居を上演する軍人の援護も重要な活動の一つだった。戦場の兵士たちのための慈善行為に勤しむことは、銃後の女性たちと前線の兵士との一体感を作り出し、女性たちの不安や心配を鎮める働きもあった。

3. 第一次世界大戦後の社会とクリスマス

第一次世界大戦により、それまでクリスマスツリーを飾る習慣を知らなかった兵士にまでクリスマスツリーの象徴的意味が浸透し、帰還した彼らは家庭でクリスマスツリーを飾る習慣をドイツ全土に広げた。

しかし、敗戦後のドイツは、ヴェルサイユ条約の調印により、すべての植民地と領土の一部を割譲し、軍事力の厳しい制限を強いられ、戦争責任はドイツにあることが定められた。なかでもドイツを苦しめることになるのが莫大な賠償金だった。この条約はドイツ国民に深い屈辱感を与え、条約に調印したヴァイマル政府に対する強い反感の原因となった。

1923年、ドイツの賠償金不払いを理由にフランスとベルギーはドイツ屈指の工業地帯ルール地方を占領する。ドイツ政府はフランスへの協力を禁止し、工場労働者にストライキやサボタージュを呼びかける「消極的抵抗」で対抗した。しかし、進行していたインフレは天文学的な規模となり、多数の失業者（失業率28%）を出すことになった。短命政権が続く不安定な政治と危機的経済状況にもかかわらず、それでも1924年以降の金融緩和策で1928年には失業率は5%まで回復する。¹³⁾ アメリカ資本による資金投入の効果だった。一方、国際的地位も回復しつつあり、1925年にはロカルノ条約によりヨーロッパにおける安全保障体制に組み込まれ、翌年には国際連盟の加盟が承認される。

その矢先だった。1929年10月24日のニューヨーク株式市場での大暴落から世界恐慌が始まった。これによりドイツからアメリカ資本の引き上げが始まり、ドイツ経済は暗転した。1930年初頭の失業者数は350万人だったが、その年末には400万人に、31年には500万人、32年には620万人（従業員3人に1人に相当し、最高値）にまで急増した。

クリスマスの季節は、経済格差が如実に現れる時期だった。こうした社会的・経済的状況を批判するのに格好の手段として、クリスマスはメディアや政治活動で利用されていく。そこで使われるクリスマスツリーには、愛国的な心情は保持されるものの、戦時プロパガンダに見られたドイツ性の優越や愛国主義といった象徴性とは全く異なるプロパガンダの利用が見られる。当時の新聞に掲載された例を見てみよう。

図6は反ユダヤ系新聞『都市の監視人』(1929年12月22日)に掲載された記事「キリスト教のクリスマス—ユダヤ人のプレゼント・テーブルでいいのか—」に添えられたイラストである。イラストのタイトルは「彼のクリスマスの望み」。金持ちのユダヤ人が、絞首刑にされたドイツ人の人形をクリスマスツリーに飾っている。その人形にはナチ党員や『都市の監視人』などの名前が見える。ドイツでは、19世紀末にユダヤ資本のデパートがいくつも開店するが、デパートもユダヤ人商店も失業の時代にあっても利益を上げていた。クリスマスの時期に明確になる貧富の差の責任者が見つかる。記事は、キリスト誕生の祝祭にはキリスト教徒の店でプレゼントを購入するよう、安いからといって、ユダヤ人の店で買い物をするのは自国民への裏切だと訴えている。¹⁴⁾

一方、社会民主党系新聞『民衆新聞』(1931年12月24日)には生活苦を表現するクリスマスのイラスト(図7)が掲載された。その絵には、「窮乏の冬のクリスマス」の詩が添えられている。



図6
「彼のクリスマスの望み」



図7
「窮乏の冬のクリスマス」

今日、クリスマスツリーもプレゼントもロウソクの灯りもない子どもたちが何百万人もいるって？考えられないことだ！彼らがプレゼントを担いで喘ぎながら歩いていく下僕のループレヒトを見るなら、それは幻想のようなものだ。

彼は、プレゼントのつまった袋を他の子どもたちに、クリスマスツリーを他の子どもたちに、ロウソクの灯りを他の子どもたちに運んでいくだけだ。君たちはどうする？君たちは烙印を押されている。だって、君たちのお父さん、彼には仕事がない。

どうしたら今日人々が幸せでいられるのか、この子どもたちはとうに忘れてしまった。玩具をおねだりすることは？お腹いっぱい食べることにすら！それでもなお、どの子どももみな遊びたがっている。

彼らはうすうすと、時代の呪いをようやく感じ始めている。まだ自分たちの運命を理解はできないが、それでもある日、認識が熟してくると、子どもたちの苦しみのなかから闘士が生まれる。¹⁵⁾

1930年代初めの経済的困窮のなかでは、クリスマスツリーを飾り、贈り物をする楽しい家族のクリスマスは、一部の富裕層を除き全く考えることはできなかった。

4. 政党とクリスマス

ドイツの敗北は、ドイツ革命に代表される共産主義者とユダヤ人により銃後からもたらされたという「背後の一突き」伝説の流布と、屈辱的なヴェルサイユ条約を受諾したドイツ社会民主党に対する敵視から、ナチ党をはじめとする右翼政党は、ヴァイマル共和政の打倒を目指した。その一方で、ドイツ共産党はヴァイマル共和政の中途半端な革命を批判し、徹底した社会主義革命の実現に向けて大衆を扇動した。右翼と左翼のイデオロギー的対立は激化したが、ヴァイマル共和政打倒という点では一致していた。ここでは、ヴァイマル時代の主要政党であるナチ党、ドイツ社会民主党、そしてドイツ共産党が、クリスマスをどのように自党の政治活動に利用したのか見てみたい。

(1) ナチ党

ナチ党は、闘争期には演説会のような大規模な催しや行進の演出に関心を向けていたため、クリスマス・プロパガンダが持つ可能性をまだ完全には認識していなかった。1922年のホーフブロイハウスのクリスマスの祝祭は、小市民的団体のプログラムと似たりよったりだった。プログラム構成を簡単に紹介すると、第一部は詩の朗読、ベートーヴェンやシューベルトの歌曲、クリスマスの歌のメドレーがあり、ヒトラーの冬至祭のスピーチがあって、第二部に移った。第二部は行進曲、ヴァーグナー、バイエルンの民衆音楽、ヘンデル、

最後に「誉れ高きドイツよ」¹⁶⁾を歌った。1925年的一幕劇では、ゲルマン民族の栄光の過去が窮乏と隷属の現在に対置され、最後に一つの星がクリスマスの夜に救世主の出現を告知する。幕が上がると、新しい救世主であるヒトラーが登場するという趣向だった。¹⁷⁾この劇には、ナチスの権力掌握後に徹底されていく、キリスト教的クリスマスからゲルマン的冬至祭への移行と、救世主としてのヒトラーのイメージ作りの萌芽が見てとれる。

ゲルマン的「冬至祭」についてナチ党に影響を与えたのは、冬至祭や「ドイツのクリスマス」という概念をゲルマン人熱や鍵十字といったシンボルに結び付けていた生活改革運動家やとりわけ民族的・愛国的青年同盟だった。どの青年同盟もロマン主義的婉曲表現を使ったゲルマン人崇拜、火と光の崇拜を重要視した。冬至祭は彼らの雑誌には、たいてい雪の降り積もる冬の森のなかで、歌とギターの音楽を伴うロマンチックな体験として記述されたが、それはのちにナチスが開催する大規模で徹底して組織化された冬至祭と比較することはできないものの、自然と結びついた夢想家たちの見世物でしかないとも言えなかった。¹⁸⁾冬の自然を理想化する描写は、国民社会主義のクリスマス神話の先駆けと見なせる思想が混入していた。

1932年に出版された小冊子「国民社会主義の儀式」でナチ党は、冬至祭の流れを定めた詳細なプログラムを提案した。集合して、火の場所へ行進し、火の回りを行進する。ファンファーレが鳴り、賛美の歌を歌う。火のスピーチ、歌を伴う点火、採火、シュプレヒコール、輪舞、終わりの歌、という具合である。¹⁹⁾しかしこの時期、キリスト教徒である党員の離党を恐れて、冬至祭のゲルマン性にもかかわらず、キリスト教的祝祭との対決を徹底することはできずにいた。

(2) ドイツ社会民主党 (SPD)

1890年に社会主義者鎮圧法が廃止されると、社会主義的教育協会や労働演劇協会によるクリスマス・アジテーション劇や社会批判的クリスマス物語、詩、歌が増加した。その主たるテーマは、プロイセン警察による組織的な労働者迫害や、中産階級の幸せな暮らしに対する労働者家族の社会的困窮の問題だった。その表現手段は、パロディーやテキストの書き換えが多かった。たとえば、「労働者のきよしこの夜」は、第一次世界大戦以前にも何度も「国家秩序を乱す」として禁止されたが、20年代にもよく歌われていた。

静かな夜、悲しい夜 / あたりはきらびやかな光に溢れている！ / ぼろ屋には悲惨と困窮だけ / 寒くて荒れて / 灯りもなければパンもない / 貧困が藁の床でねむっている。

静かな夜、悲しい夜 / パンを持ってきてくれた？ / おなかをすかせた子どもたちが訊いてくる / ため息交じりに父親が答える「いいや」 / 父さんはあいかわらず失業中さ。

静かな夜、悲しい夜 / 労働者たちよ、目覚めよ！ / 聖なる義務から勇敢に闘え / 人間らしいクリスマスが始まるまで / 自由がやって来るまで。²⁰⁾

この歌は、中産階級の『ドイツ新聞』からは、クリスマス在台無しにしたと非難され、ドイツ共産党の『赤旗』からは、古いクリスマスの歌を「嘆きの詩」に書き換えるのは、革命的プロレタリアートらしくないと批判された。

この時期、クリスマスは社会的不平等のシンボルだった。確かにプロレタリアの無神論者の間では、クリスマスの祝祭を完全にキリスト教の意味から分離し冬至祭に置き換える動きはあったが、全体としてSPDはブルジョア的祝祭の形から距離を取らなかった。キリスト教徒である社会主義者たちは「クリスマスは愛の祝祭であり、それゆえ社会主義者が闘う相手ではありえない」²¹⁾ と言って、階級間の憎しみを諫めた。この考え方に立てば、社会に蔓延する大きな経済格差の原因を洗い出してプロテストを行うことにはつながらず、SPDは静かに慈善活動を行うにとどまった。実際、同党は、20年代終わりにドイツ共産党が呼びかけた、商店街や中産階級の住宅街での食料要求デモには参加せず、その代わりに刑務所、孤児院、ホームレスの収容所でクリスマスの祝祭を開催し、市の福祉課による社会福祉的活動を支援したのだった。

SPD指導部は、カトリックの中央党との一時的連立もあり、無神論的立場は取れなかった。実際、かなり多くの社会民主主義者や共産主義者が、教会と最終的に関係を切ることができないでいた。1925年に教会教区に入っていない人口は、わずか2.47%でしかなかった。²²⁾

SPD機関紙『前進』は、冬至祭をクリスマスの選択肢として受け入れられないとした。自由思想家運動の外で冬至祭に共感したのは「社会民主主義労働青年団」だけだった。彼らは中産階級の青年同盟同様に、松明を掲げ、ギターと歌で祝祭会場へ行進し、火を点火し、炎のスピーチをし、炎を賛美する詩や格言を暗唱し、最後にみなで歌を歌った。「社会民主主義労働青年団」は、ドイツ性ではなく、社会主義とより良い未来の闘いを問題にしたが、外面的には両者を区別することは難しかった。

(3) ドイツ共産党 (KPD)

共産主義者はクリスマスに関してSPD党员よりずっと過激な発言をした。KPDの新聞『赤旗』はクリスマス・シーズンになると、華やかなクリスマス市とは裏腹に、そこで売られるクリスマスの玩具を製造するテューリンゲン地方の貧困の家内工業や大都市の労働者地区の悲惨な生活環境を定期的に報告した。『赤旗』は、クリスマスの慈善活動を訴える代わりに、読者に対しても、まだ残存しているかもしれないクリスマス感情の残滓を追

い出すことに注力した。1930年には「中産階級のクリスマスの祝祭のように虚偽のやり方で、そして狡猾な形で階級間の調和」²³⁾を説く祝祭は他にはなく、それをプロレタリアの世界観と一致させることはできないと論陣を張った。

子どもや青少年も扇動した点でも、KPDはSPDとは違っていた。ベルリンの大規模デパートのショーウィンドウの前に立つプロレタリアの子どもも、クリスマスツリー、クリスマスの雰囲気、つつましいプレゼントへの憧れを持っている。しかし、彼らにはクリスマスの魔法やロマンチックなものとは無縁の子どもらしからぬ世界に生きている。たとえば、エーリヒ・ヴァイネルトのクリスマス詩「小さなマックスとクリスマスの魔法のなかを行く」に描かれているように、KPDの数々の物語や詩は、クリスマスの商店街の散歩を「階級闘争へ導く授業」としたのである。

さあおいで、ここにはちょっとしたものがあるぞ！ / 母さんはもちろんお前とここには来やしないさ！ / そのほうがいいと思ってるからな、マックス！ / そういうことは母さんの心を苦しめるってことを分らなきゃならん。

だって母さんはお前に何一つ買ってやれないからさ！ / だからお前はそういうものを絶対に見ちゃいけないんだ。 / マックス、これをちょっと見てごらん！ これは素敵な / ステンレス製の積み木じゃないかい？ それで誰があれを買うのかな？

そうさ、あれは母さんには絶対を買うことはできないんだ！ / あっちのアルプスの風景を見てごらん！ / 電気で動くロープウエーだ！ / 金持ちのため、やつらのためだけさ！ 元気を出せ、こんなことが続いちゃならん！ / そして数百万の人びとはもう分かっているんだ。 / おれたちみんなで金持ちたちを追い出せば、世界はちがった風になるだろう、ってな。²⁴⁾

KPDは、クリスマスの幸せの不平等な配分に対する言葉による抗議だけでは満足せず、ヴァイマル共和政の1929年から1932年の最後の数年間に失業者数が600万人に近づく時期には、クリスマス市やクリスマスの商店街で頻繁に、「今日はブルジョアの住宅街に行進しろ！ あの腹いっぱいやつらのクリスマスの喜びを台無しにしてやれ！（…）彼らの来たるべき転落のファンファーレのように、ブルジョアの耳に響け。飢えたる者たちにパンを、金持ちたちに闘いを！ 資本家の転落だ！ プロレタリア革命万歳！」²⁵⁾と叫びながら行進する失業者たちの自発的抗議デモを支援し煽った。

共産主義者にとって、クリスマスツリーは中産階級のシンボルとして拒絶すべきものであり、古いクリスマスの歌も非難された。『赤旗』や『労働者グラビア新聞』に掲載された論文は、クリスマスの福音は歴史的に証明されていない「メルヘン」とであると暴露しよ

うとした。イエスの誕生日を12月25日に固定した教会政治的背景には、カトリック教会がゲルマン的クリスマスの習慣を自分たちのものとし、意味をすり替えた」と主張した。キリスト教とその祝祭に対する闘いのなかで、KPDはナチスと全く同じ根拠を持ち出したのである。

こうしてKPDは冬至祭の開催に集中した。屋外の炎の場所へみなで行進し、革命的闘争歌をみなで歌い、シュプレヒコール、炎のスピーチでイデオロギーを伝達した。ここでの炎のスピーチやシュプレヒコールには自然からのメタファーがちりばめられてはいるが、民族的・愛国的青年同盟の夢想的な自然ロマン主義からはかけ離れていた。KPDの祝祭の開催を担った「赤色前線闘士同盟」とその青年組織「赤色青年前線」は、他の青年同盟の自然ロマン主義を「精神のない自然の夢想性」²⁶⁾と呼んだ。彼らの冬至祭は準軍事的国防スポーツ練習に重きが置かれ、「帝国主義の戦争に対する戦争を、ソビエトを防衛するために」²⁷⁾というスローガンを掲げていた。こうした祝祭には、もはやクリスマスとの共通点は何一つ見られなかった。

おわりに

現在に至るクリスマスの祝い方の定型を作り出したのは、19世紀後半の中産階級だった。家庭内で祝う貴族のクリスマスを取り入れた中産階級の人々だったが、彼らは貴族とは一線を画し、自分たちの厳格な道德律に基づいた家庭を理想像とした。クリスマスの祝祭は、家庭内の規律、家族を守る家長の権威、さまざまな社会的葛藤の排除を象徴的に表現する手段として中産階級の家庭に欠くことのできない年中行事となった。中産階級がクリスマスの祝祭に与えたこうした意味づけは、結果として、教会のクリスマスの祝祭に距離をおくことにつながった。

戦争の時期になると、広く知られるようになったクリスマスの習慣、シンボル、そして儀式は、国家統一と戦争を背景として、家庭の領域外、すなわち前線や公的行事において国家権力の称賛に利用されていった。クリスマスの祝祭とその根本にある宗教的理念は歪曲され、民族主義的、国粋主義的プロパガンダに転用された。第一次世界大戦におけるプロパガンダの方法は、教会とキリスト教に対する関係には相違があるものの、1933年以降のクリスマス・プロパガンダの土台を築いたといえよう。

第一次世界大戦敗戦後のヴァイマル共和政における政治的力関係と経済状況は、社会民主主義者による大きな努力にもかかわらず、ドイツ帝国における安定した権力構造とは全く異なるものだった。インフレーションと失業による政治経済的危機は、20年代に深刻な社会的緊張と対立を引き起こした。

クリスマスの祝祭は、家庭で祝われる私的な性格を持っているにもかかわらず、クリス

マスの時期には政治的経済的状況が測られる尺度となった。愛の祝祭から理想的に期待するものは、平和、社会的安全、調和である。期待と現実がある程度一致していれば、クリスマスの祝祭は家庭においても政治的コンテクストにおいても肯定的で意味ある安定的な機能をもつ。しかし、理想と現実が互いにあまりにもかけ離れてしまうと、クリスマスの雰囲気という温床に意味の空洞化、対立、不満といった感情がはびこっていく。

右翼勢力では、さまざまな党派やナチ党がクリスマスの祝祭をゲルマン民族の祝祭に当てはめて、民族主義、反ユダヤ主義のスローガンに結び付け始めた。とはいえ、まだ徹底されず、反響も大きいわけではなかった。

ブルジョア政党やSPDの大部分は、極右と極左のクリスマスの乱用に対して、伝統的な理想像を対置するにとどまった。そうした伝統的理想像は、社会批判を控え、市の福祉課が企画する冬期救援事業のような社会福祉的施策のなかに政治的表現を見出そうとした。

KPDとナチ党は、ヴァイマル共和政において、キリスト教的クリスマスの祝祭を徹底して拒絶することで、クリスマス儀式的イデオロギー的基礎を作り上げていった。その儀式は、のちに両政党にとって条件が好転した時に、思い通りのプロパガンダとして展開できるようになる。すなわちナチ党の場合は、第三帝国におけるドイツ民族特有の「ドイツのクリスマス」であり、KPDの場合は、第二次世界大戦後のドイツ民主共和国における「社会主義的平和の祝祭」につながっていった。

註

- 1) 若林ひとみ『名作に描かれたクリスマス』岩波書店、2005年、25頁。
- 2) 同『クリスマスの文化史』白水社、2005年、42-44頁。
- 3) Doris Foitzik: Kriegsgeschrei und Hungermärsche. Weihnachten zwischen 1870 und 1933. In: *Politische Weihnacht in Antike und Moderne. Zur ideologischen Durchdringung des Fests der Feste*, hrsg. v. Richard Faber und Esther Gajek, Würzburg (Verlag Königshausen & Neumann GmbH), 1997, S.218-219.
- 4) 『名作に描かれたクリスマス』、前掲書、27頁。
- 5) Christina Deutschbein und Nils Korsten: *Heilige Nacht? Das Weihnachtsfest im Dienste der NS-Propaganda. Materialien & Studien zur Alltagsgeschichte und Volkskultur Niedersachsens*, Cloppenburg, 2007, S.57.
- 6) Siehe Foitzik, a.a.O., S.222.
- 7) ヴイトコップ編 (高橋健二訳) 『ドイツ戦歿学生の手紙』岩波新書、2014年、31-32頁。引用の際に、常用漢字および現代かなづかいに変換した。
- 8) 同上、106-111頁参照。
- 9) Foitzik, a.a.O., S.224-225.
- 10) 「クリスマス休戦」<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AF%E3%83%AA%E3%82%B9%E3%83%9E%E3%82%B9%E4%BC%91%E6%88%A6> (2022年1月2日閲覧)

- 11) Siehe Foitzik, a.a.O., S.225-226.
- 12) Ebd., S.224.
- 13) 失業率については、「ヴァイマル共和政」参照。
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%B4%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%9E%E3%83%AB%E5%85%B1%E5%92%8C%E6%94%BF> (2022年1月3日閲覧)
- 14) Deutschbein und Korsten, a.a.O., S.16.
- 15) Ebd., S.20.
- 16) “O Deutschland hoch in Ehren”、第一次世界大戦時に歌われた軍歌。曲はドイツに帰化したイギリス人ハインリヒ・フーゴ・ピアゾン（英語名ヘンリー・ヒュー・ピアソン）による。彼はすでに同じメロディの曲「君たち、イギリスの水兵たちよ」がヒットしていたので、ルートヴィヒ・パウアーにドイツ語の歌詞を依頼した。1859年に成立。この曲は第一次世界大戦後もヴァイマル共和国の学校で歌われ、ナチ時代も引き続き学校でも歌われた。
- 17) プログラムについては、siehe Foitzik, a.a.O., S.232-233.
- 18) Ebd., S.228.
- 19) Ebd., S.234.
- 20) Ebd., S.236-237.
- 21) Ebd., S.239.
- 22) Ebd., S.240.
- 23) Ebd., S.242.
- 24) Ebd., S.243.
- 25) Ebd., S.244.
- 26) Ebd., S.245.
- 27) Ebd., S.245-246.

図版出典

- 図1 若林ひとみ『クリスマスの文化史』白水社、2005年、52頁。
- 図2 同上、43頁。
- 図3 同上、51頁。
- 図4 Aus: *Die Gartenlaube*, Dezember 1896. In: Christina Deutschbein und Nils Korsten: *Heilige Nacht? Das Weihnachtsfest im Dienste der NS-Propaganda. Materialien & Studien zur Alltagsgeschichte und Volkskultur Niedersachsens*, Cloppenburg, 2007, S.10.
- 図5 Aus: *Land und Meer*, Jg. 1871. In: Ebd., S.57.
- 図6 Aus: *Der Stadtwächter* (Osnabrück), 22. 12. 1929. In: Ebd., S.16.
- 図7 Aus: *Volksblatt* (Oldenburg), 24. 12. 1931. In: Ebd., S.20.